都市空間の構想力

空間文化の博物学

東京

第5回

東京大学 都市デザイン研究室

対比の構図の先にあるもの

西村幸夫（東京大学教授）

対比的な構成原理

街路や土地利用を中心に都市の構造を見ると、東京をはじめ大多数の日本の都市は、地区空間レベルにおいて構成原理に顕著な二分法的な対比を見出すことができる。山の手と下町、武家地と町人地、大通りと路地、男坂と女坂などである。より抽象的な次元でもオモテとウラ、上（かみ）と下（しも）、聖と俗、喧噪と静寂、みずとみどり、ハレとケ、プライベートとパブリックなどの対の構図で都市空間を読み解くことがよくおこなわれる。本稿でも目黒不動尊の男坂と女坂、品川宿の上品川と下品川、善福寺の上池と下池、神仏習合の神社と寺院という対比の事例を採り上げている。

都市空間の計画性に目を向けると、前回採り上げたグリッドパターンやさらに大きな都市内幹線道路のように計画的に組み立てられた街路と自然発生的に出来たように見える路地裏との対比は誰の目にも明らかである。それは単に空間の形状のみならず、そこに成立する住宅や商店の内容や規模を規定し、さらにいうとその地域の生活パタンをも規定することになる。

一方では、計画的に空間の対比が仕組まれることもある。品川宿が上と下に分かれているのは、両者の均衡によって規模の大きな宿場町を統治していこうという空間管理の知恵であったのだろう。拮抗と緊張、補完の関係が地域に求心力をもたらすからである。計画的空間と非計画的空間の対置自体も、あるいはある種の意図の中で計画されていたのかもしれない。

大きな構図と小さな意図

しかしすこし地図から離れて、やや広い地域にまで目を向けると、ここまで見てきたような対比の構造とは異なった様相が見えてくる。

こうした対比の構図はその多くが地区レベルにとどまっており、都市全体を貫徹するどころか、界隈を越えたレベルで影響を及ぼし合っている例も少ないのである。東京にしても、前回指摘したグリッドパタンのように小さな対比空間のパッチワーク的な様相がそこかしこに見えている。

本稿で採り上げた事例もほぼすべて地区レベルで完結している。

奈良や京都の古代の道や札幌などの近代都市計画の道路を除いて、日本には都心を貫く直線の道は存在しないが、このことも都市空間の論理が襞のようにそれぞれの地点で重なり合っていることによるのだろう。

全体を眺望するにはこちらが動くしかないのである。天守や山頂へのビスタを目指した道路パタンの存在が数多く知られているが、これとても視対象まで直線で到達している例は皆無だろう。途中で道路は回り込み、迂回し、幾層もの襞を乗り越えて進むのである。

西欧の都市図が全体を鳥瞰したような都市の肖像画として総体のスカイラインを描くことに力点が置かれたのと対照的に日本の都市図は名所図として部分の集成として描かれているところに象徴的にあらわれている。洛中洛外図のように都市全体を描いたとしても、場面ごとに視点が動いているのである。

地区レベルの小さな意図は、個々の地区が重畳する大きな構図のなかで分節化され、全体の構造を構築する方向よりも小さな部分を細かく作り込む方向へと向うことになる。

遠近法に見る、部分から組み立てる地域づくりへの示唆

このことは東西の遠近法の違いに如実に表れている。西欧ではルネサンス期にいわゆる近代的な透視図法を案出したのに対して、日本では近代の揺籃期まで、多かれ少なかれ中国的な高遠、深遠、平遠という三遠の遠近法的な世界に止まっていた。[注] 三遠法ではいずれも対象は層状に存在するとされ、その重ね方が論じられている。対象相互の関係は捨象され、これらを望観する主体との関係も切断されている。

こうした空間の認識構造はおおきな都市構造のとらえ方そのものを規定してしまうのではないか。つまり、三遠の法に象徴されるような構成要素の配置として空間論の影響下、本稿で示すような対比的な空間構造そのものが重層化され、部分化されることになる。それぞれの空間は細部にその意図を貫徹させようとして、地区相互はおおきな（主として地形的な）枠組みの中で組み合わされ、ゆるやかに繋がることになる。対比の構図を完結させ、それらをさらにおおきな仕分けをおこなう際の空間構成の言語を知ることが私たちの次なる課題である。

東京が、そして大半の日本の都市空間が、細部の論理はそれなりにわかり易いのに較べて、全体像が見えにくいのは、このような理由によるのだろう。全体像がおおやけに描かれる前に、部分を重ねる幾重もの襞があるのだ。近世においては木戸や門がそれぞれの部分を閉じる装置としてあった。これらの仕掛けの総体が都市空間の全体像なのであって、全体像が存在しなかったわけではないのである。

こうした都市空間の修辞学（シンタックス）から明日の都市空間を思い描くとするならば、わたしたちはもう一度、今日において確固とした部分とはなにかから始めなければならないことになる。全体の姿が見えにくいとするならば、部分を再構築する論理を創り出すことから始めなければならない。地域を繋ぐ仕掛けを想定しつつ、地域という部分に降りていかなければならないのである。

●――注

11世紀北宋の画家、郭熙が論じた三つの遠近法の手法。山を下から見上げたときのように遠くのものが高いところに描かれる「高遠」、手前の山の谷間から奥を見るときのように中央部の奥に小さくうしろのものが描かれる「深遠」、近い山から遠い山を遠望するように遠くのものが平行して順に描かれる「平遠」の三つの構図法のこと。

●都市空間の類比、対比が人々の体験の内を充たす

都市の空間体験を充実させるには、類比を仕込み、対比を仕掛けるのが有効である。例えば、江戸五色不動という空間編集や男坂と女坂、武蔵野の二つの池の空間構成などに潜む意図に、認識かつ構成の技法としての類比、対比を見て取れよう。

図1　江戸五色不動の一つ、目黒不動尊境内にも男坂、女坂がある
(http://park6.wakwak.com/~megurofudou/keidaiann-aipage.htm)

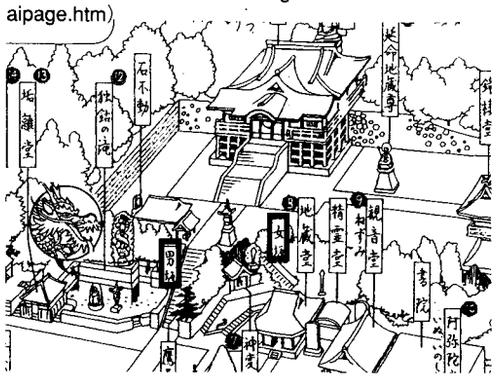


図2　男坂（左）と女坂（右）が神田駿河台へ上っていく

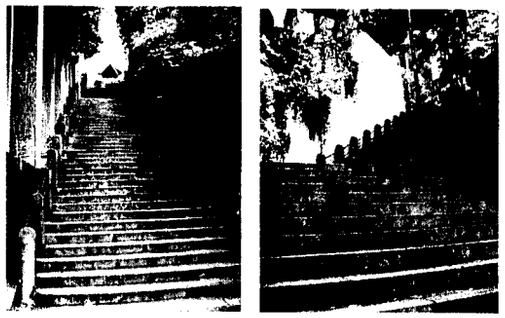


図3　震災復興第六区区画整理設計図
上が区画整理設計図、下がトレーシングペーパーをめくり従前の様子を見たところ。市街地内に男坂と女坂が新設されたのである（出典：『日本の近代をデザインした先駆者生誕150周年記念後藤新平展図録』、東京市政調査会※一部加筆）

●都市を類比に基づき編集する

江戸五色不動は東京に色気を与えている。徳川家光は、9世紀から目黒の地にあった目黒不動尊を基に、江戸の鎮護を目的として他に四つの寺院を選抜し、目白不動尊、目赤不動尊、目青不動尊、目黄不動尊と名付けた、というよく知られた縁起は、実は史実の裏づけはない。これらの不動尊をセットで語るようになったのは明治期以降である。つまり、明治期の人々の想像力が別個に存在した都市空間を「目色」の類比を基に編集したものなのである。1885（明治18）年、日本鉄道開通の際、新宿駅を挟み、目白駅と目黒駅が相似をなすように設置された。この両駅の命名の際もセットに拘ったと伝えられている。現在もこの両駅は、魅惑的な都市認識を促すささやかな類比の仕掛けとして機能しているのである。

●都市空間に対比をしかける

こうした類比的編集による都市認識は、より身近なスケールの都市空間にも見出すことができるし、それは類比より対比を意識することで体験レベルでも大きな影響を持つようになる。代表例は男坂と女坂である。ここで漸く目黒不動尊を訪ねてみよう。でんと構える仁王門を潜り抜けて、正面に存する急な階段が男坂、その脇から上っていく階段が女坂である（図1）。急勾配を気にせず直線で上っていく姿を男性に擬え、途中の踊り場で休み、少し緩やかに曲がり込むように上っていく姿を女性に擬え、やはり仄かに色気づく男坂と女坂という名付けとなったのである。男坂と女坂は始点と終点、機能は同一であるが、空間体験としては対比的である。行きと帰りそれぞれの経路を用意するという交通整理面での実用的な意図のみならず、対比的な景観で往来体験を演出するという意図もあったと感知しておきたい。

男坂と女坂は、都内に限っても、山王神社、愛宕神社などの多数の神社の伝統的アプローチに見ることができるが、それは神社空間に限定されない。猿楽町と神田駿河台とを結ぶ男坂と女坂は、関東大震災後の震災復興土地区画整理事業によって新設されたまちなかの階段状の街路である（図2、3）。寺社の姿はなく、両者は起点も終点も異なるが、上るべき高さと与えられた距離は本来殆ど一緒である。しかし男坂は直線で、女坂は屈曲している。二つの対比的な形状の坂道をつくり、更に接していないそれらを組とする名付けを行った事実の背景に、このまちを回遊する際の空間体験を一歩高みへと引き上げようとする意図が見透かされる。

近年でもそうした意図の顕れを見ることができる。神田明神は勇壮な男坂のみを持つ。女坂は廃道となって久しい。しかし、男坂の南にある曲折し踊り場を持つ無名の坂道が、いつのまにか通称で明神女坂と呼ばれるようになってしまった。そして、無名の坂道の空間体験は特別なものへと仕立てあげられていくのである。

●類比に適い、対比に適う

目を郊外に向けよう。東京区部の西の境は武蔵野台地の際で湧水池が点在し、公園の核となっている。石神井公園、武蔵関公園、妙正寺公園、善福寺公園、井ノ頭公園などである。とりわけ二つの池を持つ石神井公園と善福寺公園が興味深い（図4）。

図4　性格の異なる池のペアがまちの核となっている。石神井池と善福寺下池はともに昭和初期に造成された人工池である。町並みならぬ「池並み」の創造事例である

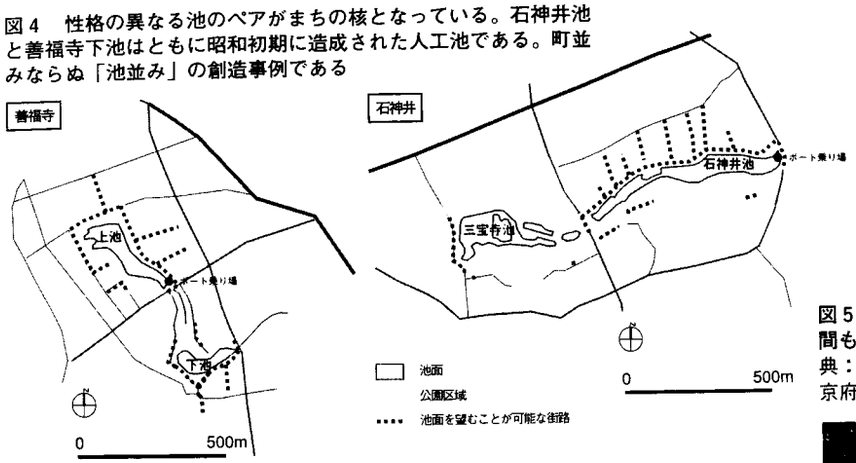


図5　昭和初期、三宝寺池と完成間もない石神井池を俯瞰する（出典：『風致地区改善施設概要』、東京府）

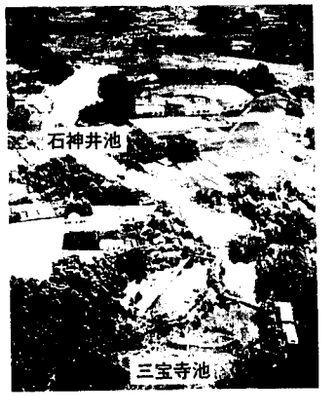
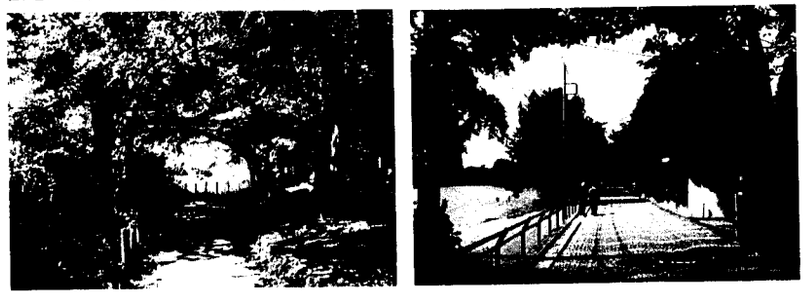


図6　深い木立を侍らした幽遠な三宝寺池（左）と住宅地と連続した開放的な石神井池（右）



石神井公園の三宝寺池と石神井池、善福寺公園の上池と下池のペアはともに武蔵野の杜の雰囲気を保持しつつも、三宝寺池は深い木立に囲われ、寂然とした陰の風景であるのに対し、ボートが浮かぶ石神井池は明るく、陽の風景である（図5、6）。善福寺公園では上池が陽、下池が陰である。生態保全とレクリエーションが拮抗するその風景は類比に適い対比に適う。だからこそ魅惑的である。実は石神井池と善福寺下池は昭和戦前期に湧水池の隣に造成された人工池である。しかしその造成は単純な複製行為ではなかった。これらの新参の池は、地域の核である古参の池の価値をも高めるように、類比と対比を強く意識して創造されたのである。

核となる池の類比と対比の共存はまちのありようにも映し込まれる。例えば、石神井池北方の水面を見通せる風光明媚な住宅地と三宝寺池の南方の深い木立を背景とした閑静な住宅地は互いの特性を際立たせている。池はまちを一つにまとめつつ、複数の個性をまちにもたらしているのである。

（中島直人）

●まちの連結・分節が一筋の街道を彩る

一見、一本の冗長的な線に見える街道筋のまち。しかし、実際には複数のまちが拡張、連結していたり、一筋のまちの内側が分節されていたりする。この連結や分節がまとまり同士による競い合いを生み、それぞれのまちを際立たせている。

図1　3キロ強の旧街道沿いに計七つの商店街が連なる。各商店街は成立時期や歴史的背景が異なり、緩やかにカーブを描きながら、線形を特色づけている。

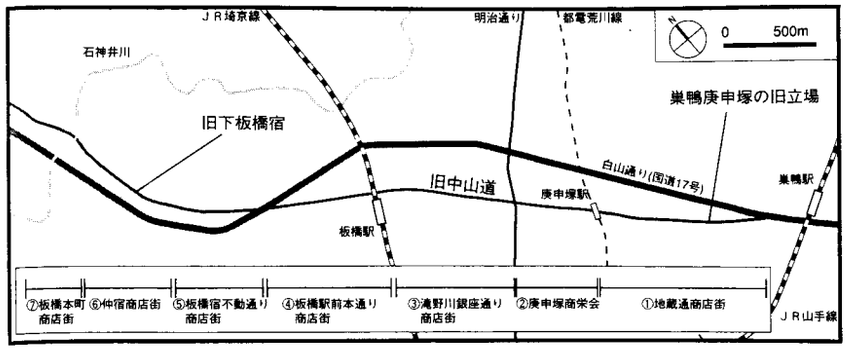


図2　参詣客等の人通りで賑わう①地蔵通商店街（写真右）、直線道路による見通しの良い③滝野川銀座通り商店街（写真中）、緩やかに川へ下っていく④仲宿商店街（写真左）

●都市が街道筋に細く延びる

街道筋に延びるまち。街道の往来から、まちの形態は自然と街道沿いに細く延びていく。特に従来からの幅員を維持している旧街道筋には、非常に長い商店街が続き、一般的な駅前商店街では見られない特徴的な線状都市を形成していることがある。

特徴的とは言え、ただ長い街道筋はともすると、単調で冗長的なまちになりやすく、あまり魅力的ではないかもしれない。しかし、こうした昔ながらの街道筋の商店街を行くと、意外と活気のある商店が建ち並び、長さのわりに歩けてしまう。これをつぶさに見てみると、一筋の空間の中に、変化を与える仕掛けが随所に見られ、抑揚のある都市空間が形作られていることに気がつく。

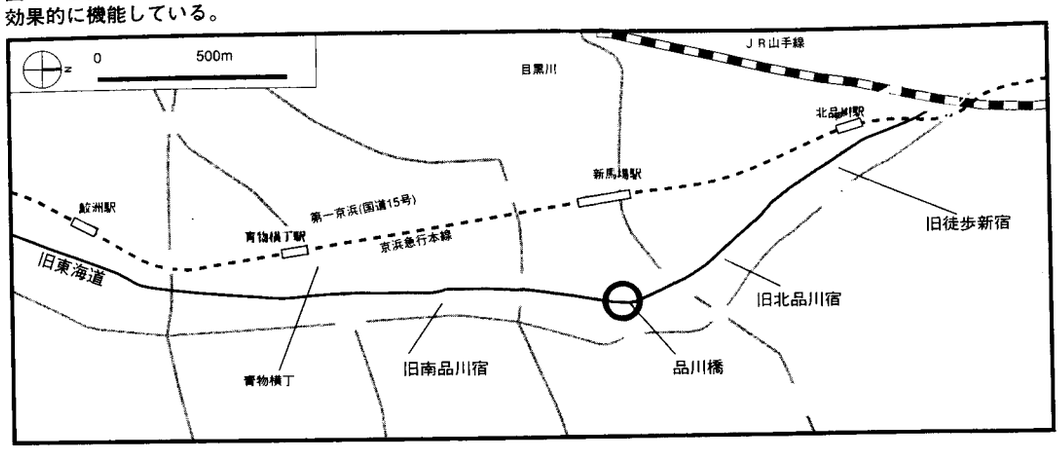
●都市を延長させて一本につなぐ

旧中山道沿いの巣鴨地蔵通り商店街（豊島区）から板橋本町商店街（板橋区）にかけて歩くと、商店街が一定の幅員で、途切れずに続いており、数キロに及ぶ一本の旧街道が作り出す都市空間を体験することができる。

この長い商店街を北上すると、まず、高齢者に人気のとげぬき地蔵のある地蔵通り商店街を通り抜ける。そして庚申塚の交差点を過ぎ、都電荒川線を跨ぐ辺りで、気がつくと庚申塚商栄会という落ち着いた次の商店街へ移っている。さらに広幅員の明治通り、国道17号やJR線等と交差点は、板橋駅を挟んだ二つの商店街のちょうど境界となっているが、どちらも視線が途切れず、真っ直ぐ見通せるため、商店街の連続性や賑わいが絶たれない。そして、国道上の高速道路を潜り、旧下板橋宿の商店街へと入り、石神井川を越えた板橋本町商店街まで続き、合計で七つの活気ある商店街が連なっている。

この旧中山道の街道筋は、必ずしも一時代につくられたまちではなく、江戸時代には巣鴨寄りの庚申塚が「立場」という休憩所として栄え、板橋は中山道第一宿として賑わい、この二つが街道沿いのまちであった。その後の東京の拡大の中で、街道沿いのまちは延伸し合い、現在では旧街道沿いの連担した商店街として一本に連結しつつ、互いに競い合っている。

図3　目黒川を渡る品川橋は、ちょうど街道筋の「く」の字の中心にあり、北品川と南品川を分節する装置として効果的に機能している。



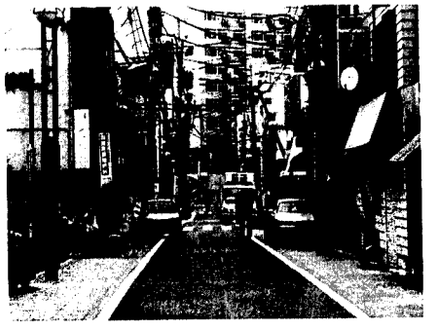


図4　湾曲した街路に沿って視線の抜けない北品川（写真右）と、左右にゆらぎながらも視線の抜けが強調されている南品川（写真左）。

●南北の拮抗が都市を成熟させる

線状に長く延びるまちの例は、旧品川宿にも見ることが出来る。品川宿は現在の京急北品川駅付近から南へ約1キロ強の長さを持つ宿場町で、現在は旧街道沿いを商店が連なり、非常に長い商店街を形成している。

かつて品川宿付近は、海岸沿いに街道が走っていたため、街路が旧海岸線に沿って弓なりに湾曲していた。現在も、旧宿場町の中ほどには目黒川が横切っている。これが街路景観に変化を与え、旧宿場町を北から歩いて来ると、街道の湾曲部分を過ぎた地点に川と橋（品川橋）が現れ、ちょうど目黒川を境に街路形状やまちの雰囲気が変化することに気がつく。

開設当時、品川宿は目黒川を挟んで北品川宿と南品川宿の二宿で構成され、南品川宿が北品川宿の倍近くの長さを持ち、規模の面で北に勝っていた。しかし1702年、北品川宿のさらに北側に、遊興的性格の強い徒歩新宿が新たに加わることで、宿場内における目黒川以北が発展を強めていく。以降、品川宿は北の吉原、南の品川と言われる程の発展を遂げるが、遊興都市としての賑わいを見せたのは徒歩新宿を含む北品川で、南品川では貸座敷等の遊興施設はあまり立地せず、現在の青物横町にも近接しており、より近郊農村との関係の濃いまちとして成り立っていた。

徒歩新宿の加入以降、北品川と南品川は、同等の規模を持つまちに成長し、性格の異なるまちとして共存・競合しつつ発展した。そして、発展には常に目黒川による空間の分節が重要な役割を担っていた。南北の宿場の中間に目黒川があったことで、双方のまちの境界が認識され、双方の対立性を意識する際にも共同性を意識する際にも、容易に互いを違うものとして認識することができ、その結果、現在まで切磋琢磨する関係を持続させることができたのである。

一見同じような商店の建ち並ぶ線状都市であるが、詳細に見てみると、そこには単調とは言えない空間的な分節があり、それは空間的にも機能的にも刺激を与えるような仕掛けとして、街道筋に効果的に配置されていることが分かる。

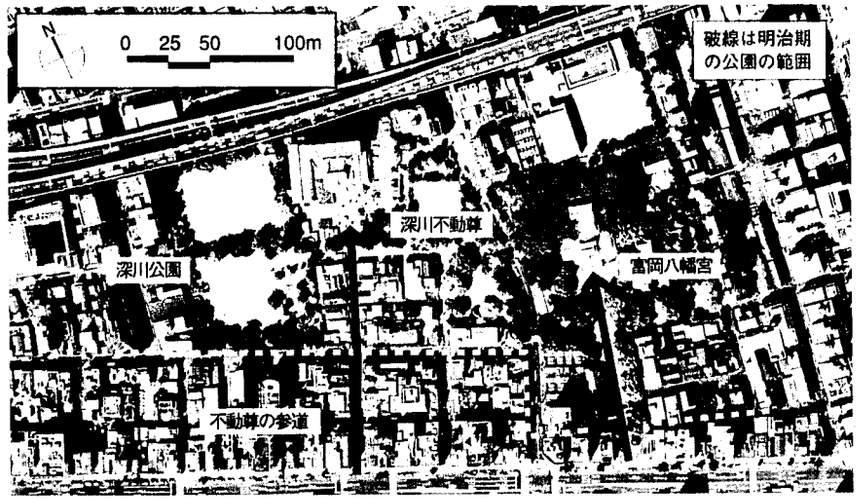
（中島伸・吉田拓）

●隣り合う開放領域が、まちの営為を包容する

東京のオープンスペースは、質の異なる領域を取り合わせ、併置させながら成立しているものが多い。これらは一見すると便宜的な印象を与えるが、そこには都市の営みを豊かに醸成する手法が見えがくれしている。

図1　（左から順に）深川公園、深川不動尊、富岡八幡宮

図2　深川公園周辺の現況（江東区）（Google Earthより抽出した航空写真に筆者加筆）



●「合わせ技」の空間創出

異なる質を持った領域の組み合わせは、ある必然性をもって生み出される場合がある。都市改変に対する大きな意志を持ちながらも、旧来の構造に規定されざるを得なかった近代の東京においては、既存のストックを活用しつつ、新たな目的にも適うような空間創出の手法が捻出された。その端的な例が公園であろう。

東京の公園は、明治6年の太政官布達により、寺社境内（寛永寺、浅草寺、増上寺、富岡八幡宮）や名所（飛鳥山）に指定されたものに端を発する。レクリエーションの場として定着させることを考えれば、以前から庶民に浸透していた遊興的な場に公園を重ね合わせる手法は、理に適ったものであった。

●神域と遊興域の併存

寺社の境内は、信仰の場であると同時に、祭事や催し物といった娯楽の場でもあったが、後者の質を継承しつつ転換を試みたのが、境内の公園化であった。その意味で、富岡八幡宮の境内に設けられた深川公園（江東区）の空間配置は興味深い。

構成を見ると、八幡宮の西に深川不動尊が立地し、その周囲に取り付くように深川公園が位置している（図1、2）。当初この領域は、富岡八幡宮の別当・永代寺の境内であった。維新後の神仏分離令により永代寺は廃寺となり、跡地が深川公園となるが、江戸時代に永代寺で成田山不動尊の出開帳が行われ、大いに人気を博したことから、明治15年に不動堂が新たに建立される。現在、不動堂への参道沿いには、参詣客相手の店が連なり、隣接するレクリエーション空間と一体となって、賑わいの領域を形成している。

開放的で遊興的な性格を継承した西側に対し、東側の富岡八幡宮の社殿周辺は、鬱蒼とした緑に覆われ、今も静かな神域として維持されている。このような質の異なる領域の組み合わせが、不動尊の縁日と、勇壮な深川祭りという、深川に欠かせない催時／祭事を強かに支えている。

●領域二分法の妙

二つの質を持った領域の併置が、社会的要請から絶妙に生み出される場合もある。清澄庭園（江東区）は、大名庭園の流れを汲む名園として知られているが、その西側には、より開放的な清澄公園が隣り合う。

これらの敷地は、明治13年に岩崎弥太郎により「深川親睦園」として造成された、一体の庭園であった。同園は、大正12年の関東大震災において、下町の貴重な避難場所となったのを契機に、東側半分が東京市に寄付され、昭和7年に清澄庭園として開園する（図4）。一方で西側の私有庭園は、企業用地等に転用された後、今度はより開放的な公園空間として整備され、現在の状態が生み出された（図5）。境界を貫く道路を挟んで、両園の入口を角地に設け、隣接させることで、互いの一体感がより印象づけられる（図3）。

都市のオープンスペースの質や意味を、時代に応じて巧みに取り合わせながら推移した結果、市民に開放されたのびやかな憩いの領域と、江戸以来の庭園をしのぶ興趣に富んだ領域が違和感なく併置され、都市の余暇文化を豊かに彩るのである。

●補完された静寂

池袋駅東口の繁華街から一歩踏み入れると、別世界のような静寂と緑に包まれた空間が存在する（図7）。戦災復興の区画整理で整備された南池袋公園（豊島区）である。

付近の静寂は、層状に取り囲まれた街区配置と、背後の墓地により担保されている（図6）。区画整理の際に、付近に散在していた複数の寺院と公園とが、一街区に束ねられた結果である。公園と墓地は、互いに周囲の市街地との緩衝帯となり、都会の喧噪を隔てている。墓地はビルの圧迫感を遠ざけ、公園の樹木は、墓地に潤いを与えている（図8）。さらに周囲を歩くと、敷地境界の植栽の設えにも統一感があり、市街地の側からも、一体の領域として感じることができる（図9）。

震災・戦災は東京におけるオープンスペース拡充の大きな契機となったが、互いに限られた敷地を効果的に組み合わせて配することで、高密な都市環境に、落ち着きとゆとりをもたらしているのである。

（永瀬節治・後藤健太郎）

図3　清澄庭園入口（左）清澄公園入口（右）（江東区）

図4　清澄庭園開園当初（昭和12年）（東京1万分の1地形図集成）

図5　現在の清澄庭園・清澄公園

図6　南池袋公園と寺院群（豊島区）

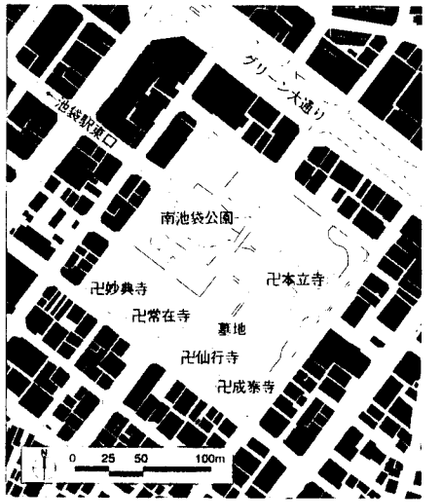


図7　繁華街から公園を望む

図8　公園の樹木が墓地に潤いを与えている

図9　街区を一周する大きな樹木